



仙台ゆかりの地名

全国には仙台や宮城に由来する地名がいろいろと残っています。例えば、京都市伏見区の「桃山町正宗」や東京の「仙台坂」「仙台堀川」は、伊達政宗や仙台藩の屋敷に関係した地名です。また、北海道の「伊達市」や「札幌市白石区」が、明治時代に旧仙台藩関係者の北海道移住に由来する地名であることは、多くの人に知られているところです。

しかし、岐阜県岐阜市にある「橋本町」が、仙台とゆかりが有ることを知る人は少ないでしょう。JR岐阜駅とその北口一帯を指す「橋本町」は、実は明治時代に仙台で活躍した実業家橋本忠次郎にちなんだ地名なのです。

近隣の経済界では経費を抛出する者がなく、拡張工事は暗礁に乗り上げか



橋本店の社屋であった洋館。昭和44年に宮城県に寄贈され、県民の森に移築された。隣接していた橋本忠次郎の邸宅は仙台市に寄贈され、茂ヶ崎庵となった。

けたのです。

そうした中、仙台の橋本店が工事を請け負うことになり、同社の社長である橋本忠次郎が宮城県の大地主であった斎藤善右衛門に交渉して資金の提供を受けることになり、工事が実現し、大正二（一九一三）年、新しい岐阜駅が開業しました。「橋本町」の地名は、このような岐阜駅開業における橋本忠次郎の功績を記念して付けられたものなのです。

新しい交通機関・乗合馬車

安政三（一八五六）年、熊本で生まれた橋本忠次郎は、若くして東京に出て、貿易・建設業を営む大倉組に職を得ました。

当時、全国的に土木事業が活発に行われ、大倉組も各地で工事を請け負いました。宮城県でも明治十（一八七八）年に着工された野蒜築港と宮城集治監（後の宮城刑務所）建設を大倉組が請け負っています。忠次郎が来仙したのも、この仕事に携わるためでした。

来仙後まもなく橋本忠次郎は独立します。建設業とともに忠次郎が取り組んだのは、馬車会社の経営でした。鉄道が普及する以前、新時代の交通機関として注目を浴びていた乗合馬車に忠次郎は目を付けたのです。

仙台では、明治十年に国分町と岩沼を結ぶ馬車会社が開業していましたが、忠次郎が営んだ馬車会社・万里軒は、より長距離を結ぶ乗合馬車を走らせました。明治十四年には仙台・白石間、同十六年には福島まで延伸した

鉄道建設からの発展

乗合馬車の先行きに暗雲が立ち込めてきたころ、橋本忠次郎はその馬車のライバルとなった鉄道の建設に関わることになりました。

それは、土木官僚として宮城県に着任し、後に民間に転じた早川智寛が設立した早川組への参加です。早川組は、東北や北海道の鉄道建設で急成長しますが、明治二十六年、早川は資産を社員に分配して会社を解散しました。この時、早川組が手がけた鉄道事業の多くを引き継いだのが橋本忠次郎だったのです。

忠次郎は橋本組を設立し、奥羽線、常磐線、陸羽東線など東北各地で鉄道建設を請け負いました。とくに難工事が多かった奥羽線の成功が、橋本組の名前を大いに高めたのです。

このほか、北海道の鉄道建設でも実績を挙げた橋本組は、橋本店と改称し、鉄道にとどまらず、建設業全般に事業規模を展開していきます。岐阜駅の建設も、そうした橋本店が全国的に飛躍する中で行われた仕事でした。

橋本店の経営に携わる一方で、忠次郎は製紙業、印刷業、醸造業や鉱山経営など幅広く事業を展開しました。さらに内国通運株式会社（日本通運の前身）の社長にも就任した忠次郎は、大正五（一九一六）年一月一日、六十一歳で亡くなりました。

馬車や鉄道など、時代の波を読みながら、堅実に、そして地域発展を視野に入れた彼の事業精神が、「橋本町」の名を今に残した大きな理由だったと言えるのではないのでしょうか。

仙台市史

好評発売中

通史編6 近代 1

明治時代の仙台 近代化とそのくらし

◆A5判 520頁 オールカラー ◆定価3000円(本体2858円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館/株式会社宮城県教科書供給所
TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183

お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074



万里軒のチラン 万里軒は、橋本忠次郎が設立した馬車会社で、明治10年代後半に仙台と福島を結ぶ乗合馬車を運行していた。